

大報恩寺本堂後壁画の釈迦説法図

慶應義塾大学 林 温

大報恩寺本堂は京都市内に遺存する最古の仏堂として国宝に指定されている。この本堂内陣須弥壇の仏後壁には、保存状態が悪いものの壁画が描かれている。本壁画については、昭和29年の本堂修理工事の際の所見により、後壁自体が二度の改変を経ているとされ、現在の壁画は二度目の改修の際、すなわち、正応4(1291)年頃に制作されたと想定されているが、筆者も同意見である。しかし、壁画調査は十分とはいえず、その後も照明設備もなく一般公開もされていないために、美術史上等閑視されてきたといつてよい。

近時、この壁画を調査する機会に恵まれ、その美術的かつ美術史上の価値を再認識したが、特に壁画裏面に表された釈迦説法図は同主題による遺品の中でも特筆すべき規模と優れた作行きを見せており、その情報を広く美術史研究者と共有すべきであると考えに至った。

壁画の概要を祖述すると、須弥壇北側の二本の四天柱に挟まれた後壁表裏にそれぞれ仏教尊像集会図と釈迦説法図が描かれている。両面ともに損傷甚だしくその図様を完全に把握することは不可能である上、経年による薫染のため肉眼での観察ではほとんど判別しえない。しかし、赤外線写真撮影により、残された部分から当初の構図の大概を復元的に推測することができる。

壁画の表側には、海上に涌き起こる雲の上に集会して、おそらくは須弥壇上に安置された彫像本尊を礼拝するように、八菩薩以下の群像が表されており、当代の仏画遺品として注目すべきものであるが、それ以上に注目されるのが裏面である。

仏後壁裏面は画面一杯に山容が描かれているが、画面中央上寄りに釈迦を中心とする説法座が表され、画面の下方は断崖をなす。右下隅に二輛の鳳車が表されており、ここで下車した王侯の一行が蛇行しつつ登山し、釈迦の説法を聴聞するにいたる情景が表されている。その構図は平安時代後期以降の釈迦説法図の図像を継承しているが、本図の存在によりその図像系譜を明確に跡付けることができる。釈迦説法場面では古い図像を踏襲しつつ新機軸も打ち出している。さらに点景をなす樹木や溪流、橋などの景観表現は優れた技量を示しており、中世前期のやまと絵山水画遺品としても特筆されよう。本発表では、できるだけ多くの細部写真を紹介しつつ、本図の持つ絵画史上の意義について論じたい。